

再表現における創造性とは何か

桑原章寧（貞静学園短期大学）

目的

音楽科教育が担うべき重要な役割の一つとして、創造性の育成が挙げられる。従来から行われてきた歌唱活動や器楽の演奏活動において、想像力の育成を中心とはしているが、創造性の育成に直接寄与できるような活動の展開はできないのであろうか。またその際に、指導者はどのようなかわり方をするのが望ましいのか。このような問題を解決するため再表現における創造性について考察し、その観点について整理する。そして再表現における創造性とは何かを明らかにすることを目的とする。

結果

再表現における創造性とは、音楽に対する一つ一つの解釈を新たにし、つくり上げていくことにあった。今回分析した映像での音楽家の言葉は、形式的側面についてのみ指示するのではなく、内容的側面、技能的側面、文化的側面が相まって語られていた。このことが音楽表現に深みと豊かさを増していると思われる。音楽教育実践の現場では、高度な音楽教育を受けてきたプロの演奏家ではないため、さらに噛み砕いた説明が必要になると思われるが、形式的側面についての指示を出す際にも内容的側面、技能的側面、文化的側面と関わらせることが重要であるといえた。

方法

はじめに、創造性の定義について検討する。つぎにレーザーディスク「世界の名指揮者」のうちノイマン指揮、レオノーレ序曲第3番を取り上げ、作品(演奏)をつくる過程における指揮者ノイマン(音楽家)の言葉を、西園芳信の音楽の形式的側面、内容的側面、技能的側面、文化的側面の4側面に分けて分析し、これを元に、創造性に結びつく発言内容から再表現における創造性とは何かということについて明らかにする。

内容

1. 創造性の定義に関する検討

(1) 川喜多は「創造性とは、発明発見の能力ではなく、問題解決能力のこと、創造と伝統(保守)は互いに相からみながら社会の発展に寄与する。なすに値する切実なものごとを、おのれの主体性と責任において、創意工夫を凝らして達成することである。」¹⁾

と述べている。一般には新しいものをつくったり発見したりすることが創造であると捉えられている。が、川喜多は創造とは、問題解決の能力であると捉えている。音楽活動に置き換えると即興表現や作曲活動のみに創造性が育まれるのではなく、鑑賞活動における「どのように聴取するか」や再表現活動における「どのように表現するか」という問題を解決するところにも創造性が育まれると言えるだろう。

(2) 日本創造学会の定義

日本創造学会では創造性について以下のように定義している²⁾。

人が(創造的人間/発達)

問題を(問題定義/問題意識)

異質な情報群を組み合わせ(情報処理/創造思考)

統合して解決し(解決手順/創造技法)

社会あるいは個人レベルで(創造性教育/天才論)

新しい価値を生むこと(評価法/価値論)

川喜多と同様に問題を解決する過程を経て生まれる新しい価値観であると定義している。

(3) 音楽活動(再表現)における創造性とは何か。

以上のことを踏まえて、再表現における創造性とは、音楽を聴いたり楽譜を読んだりする活動から、どのような表現をつくるのかという問題を解決するために、試行錯誤しながらよりよい表現を求め、そこに生まれる価値観であると仮説的に定義する。

2. 音楽家が練習で話す内容の分析

レオノーレ序曲第3番³⁾をノイマンがどのようにつくっていくのか楽団員に指示や思いをどのように伝えていったのかについて、その内容を西園芳信の表現の論理⁴⁾から導出した①音楽の形式的側面、②音楽の内容的側面、③音楽の文化的側面、④音楽の技能的側面に分けて分析をした。分析を通して以下のことが明らかとなった。

①音楽の形式的側面についての指示は明確である。

②形式的側面についての指示をする際にも、以下のような比喩的な表現が用いられる。例:「もう一度序奏の部分を管楽器の最初の一撃とその後のディミヌエンドは大変に難しい声楽に当てはめて考えればわかるが高い単一音を弱めるのは至難の技です。」

③音楽の内容的側面については、形式的側面で指示したことを指揮者自身がイメージした内容として伝えている。例:「この最初の小節の役目は我々をベートーベンの世界へと導き入れることです。曲が始ま

